

旧暦の六月二十五日（現在ではその近くの日曜日）には各地で綱引きが行なわれます。綱引きは豊年の予祝と、害虫駆除を祈願するために行うといわれます。町内でも幸地、棚原、小那覇、我謝、小波津、呉屋、津花波、小橋川、内間、嘉手苅で現在も綱引きが行われています。

今回は呉屋で行なわれた綱引きを紹介します。

八月四日（旧暦六月二十六日）、呉屋モーでは朝から綱づくりが行なわれました。綱の材料は、米を収穫した後に残るワラです。かつては呉屋に自生するカヤを利用していましたが、現在ではカヤが少なくなつたので、金武町あたりから田二百坪分のワラを買ってきつてつくっているそうです。

最初にワラ束を、男性三人が一組となり、声を掛け合いながら息を合わせて力強く緋（な）い、全長八〜九メートル（目安）、直径約十五センチの綱にします。次に、できあがった綱を四

本ずつ束ね、縄で締め上げます。これを二体つくり、それぞれの中央部を輪にして、マチジナ（巻綱）で巻



綱づくりのようす

いていきます。最後にそれぞれにティーンナ（手綱）を六本結びつけ、ミーンナ（雌綱）とウーンナ（雄綱）の完成です。

綱引きの前に、トウン（殿）とナカヌウタキ（中の御嶽）での拌みがあります。ウンサク（神酒）と酒を供え、字の代表が手を合わせ、祈願します。現在の呉屋のウンサクは、棚原のジンス（神酒）とは違い、発酵させません。米に砂糖を加えて煮たもので、飲み物の玄米のような味です。

午後六時すぎ、銅鑼と法螺貝を鳴らし、各家庭で待っている人びとに合図をすると、だんだん人が集まり、会場は活気を帯びてきます。集落の東西で両方にわかれ、

いよいよ綱引きが始まりま

す。ミーンナにウーンナを入れ、直径約十センチ、全長およそ一・七メートルのカヌチ（棒）が入ってふたつの綱がひとつになった瞬間、一斉に引き始めます。

大人から子供まで、みんな綱を引き、周りでは銅鑼や法螺貝、太鼓を鳴らして応援します。呉屋では二回引きますが、今年はずと西がそれぞれ一回ずつ勝ちました。

人々が、地域の豊年祈願というひとつの思いを持つて一本の綱を引く。綱引きはその思いを確認する場でもあるようです。綱引き終了後に見た、誇りに満ちた笑顔がとても印象的でした。



雄綱(左)と雌綱(右)